

住宅地における「ポイ捨て」行為によるゴミ問題と住民の環境意識

——中国大連市 sk 団地の事例から——

王 雲武

はじめに

私は日本に来る前に、中国大連市市役所で一年半ぐらい働いていた。その期間、大連市内にある新開発住宅団地に生活ごみが随意捨てられる事件が多発し、マスコミや市政において大きな話題になった。私は当時から、そのようなことがなぜ繰り返し発生するのかについて興味を持っていた。そういった背景が本研究へと繋がっている。

1 研究の背景

今中国の大都市においては、様々な都市環境問題の中でも、ゴミ問題が特に注目されている。都市開発/再開発事業が進むことに伴い、都市の物理的インフラの整備につれて快適になるはずの都市生活は、住民・使用者の環境への関心の浅さから、ゴミに関する環境の改善が進まない問題を抱えている。中国大連市新開発住宅団地内においては、住民の「ポイ捨て」行為により発生するゴミ問題¹が大きな話題となっている。なぜ「ポイ捨て」現象は絶えず発生するのだろうか。

本研究において「ポイ捨て」行為とは、個人便益を追求するために、ゴミ回収場以外のところに生活ゴミを捨てることを指している。

近年、世界的に「環境」ないしは「環境問題」への世間の関心が盛り上がってきた。環境問題を議論するときに、「環境問題」という言葉の意味を読み取る人によって異なる可能性がある。つまり「環境問題は認識の問題である」とも言えるのである。人々がどのような環境認識ないし環境意識を持っているのか。またこの認識や意識を規定している要因は何であるのか明らかにすることが、今の環境問題を解決する上で大きな役割を果たすことは間違いないと思われる。

われわれ人間の環境意識は、様々な条件によって影響され、制限を受けている。近代都市化による構築環境の変動のみならず、政治・法律・習慣など社会文化的側面においても変動が生じさせられる。それに伴って人間の行動・思考・習慣がそれらの変動に規制され、影響を受け、適応しなければならない

のである。二十世紀八十年代からの中国の改革開放は社会変動の典型である。この二十数年間中国において、社会各側面に大きな変化が見られた。特に中央政府主導の社会体制が変わりはじめ、政府、地方、民間など各次元により国の発展を図っている。このような社会文化的変化は国民の環境意識にどのような影響を与えたのかについて、注目する必要があるだろう。

一方、今までの環境問題に関する研究において、個人が環境問題についてどう考え、どう対応しているのかについて焦点を当てたものはあまり見当たらない。しかしながら、個人の環境意識は、環境問題研究の基本的対象であり、様々なレベルの環境問題と関連している。

以上により本研究では、まず身近にある「ポイ捨て」行為によって引き起こされているゴミ問題の実地調査を行った。次に、ゴミ問題に関する住民らの環境意識を調査し、環境意識の特徴を理解することを試みる。さらに、住民らが持つ環境意識構造を形成する要因を探索する。

2 研究の手順

2-1 調査の方法

2-1-1 予備調査

この段階では、資料及び情報を収集することにより、調査対象地を大連市内にある sk 団地に決め、調査対象地の特徴とゴミ回収に関する法律を調べた。

2-1-2 写真撮影

sk 団地の「ポイ捨て」の現状を把握するために、写真撮影による実地調査を行った。

2-2-3 質問紙調査

質問紙は大きく三つの内容から構成される。

①被調査者の属性

(年齢、性別、家族構成、教育歴、職業、居住期間、以前の居住地)合計7つの質問を尋ねた。

②地域環境についての評価

地域環境の評価について(愛着、定住意識、総合的イメージ、衛生状況、買い物物の便、交通の便、教育条

件、娯楽条件、医療条件、自然景観、近隣関係、治安状況)、合計11の質問項目を提示した。

③「ポイ捨て」行為によるゴミ問題に関する意識選択肢を提示する選択項目と自由回答項目を質問した。

質問紙に基づいた聞き取り調査は、2002年4月5日から4月11日まで1週間にわたって行われた。83人分の回答が得られたが、有効なデータとして80人分の回答を分析することとする。

2-2 分析の方法

2-2-1 写真撮影について

撮った写真から「ポイ捨て」現象の物理的特徴を「ポイ捨てされたごみの種類」、「ポイ捨てされた場所の空間的特徴」、「ポイ捨て現場の時間経過による比較」、「ポイ捨てされたゴミの種類と場所との関係」という4つの視点によって把握する。

2-2-2 意識調査質問紙について

(1) 調査対象者の属性と居住環境に対する評価を集計する。

(2) 「ポイ捨て」行為によるゴミ問題に関する自由回答部分に対し、次の手順で分析を行った。

- ① 回答ごとに中心的な言葉(キーワード)を取り出し、分類(カテゴリー化)する。
- ② 「環境意識は問題意識、原因意識と解決選択意識(保護意識)という側面によって構成される」(李志東, 1999)²という視点のもとに、住民の環境問題意識構造(問題意識、原因意識、解決選択意識)及びその特徴を分析する。
- ③ 個人の持っている環境意識を分類し、典型的な環境意識及びその形成要因についての分析を行う。

3 結果及び分析

3-1 写真撮影による「ポイ捨て」現場の把握

(1) ポイ捨てされたごみの種類

sk団地でポイ捨てされたゴミは大きく「日常生活によるゴミ(一般ゴミと粗大ゴミ)」と「非日常生活によるゴミ(建築ゴミ)」に分けられる。



図2 粗大ゴミ



図1 一般ゴミ



図3 建築ゴミ

(2) ポイ捨てされた場所の空間的特徴

ポイ捨てされたゴミは「セミパブリックな空間(例えば駐車場)」と「パブリックな空間(例えば空き地)」に捨てられる。



図4 駐車場



図5 空き地

(3) ポイ捨て現場の時間経過による比較

異なる時間(四月二日と四月三日)に同一地点Aでの写真により、数量、外観や種類など違っているゴミが発見されたため、その空間がゴミ回収場と同じように固定的空間としてポイ捨てされていることが推定できる。



図6 4月2日の場所A



図7 4月3日の場所A

(4) ポイ捨てされたゴミの種類と場所との関係

- ① 日常生活によるゴミは廊下、駐車場、建物の出入り口など人が日常移動(出かけ、出勤)する際によく通るルートに捨てられた場合が多い。
- ② 建築ゴミのような非日常生活によるゴミは公共緑地、敷地内の空き地などパブリックな空間に捨て去れた場合が多い。

3-2 質問紙調査の単純集計

質問紙の選択項目について、統計的手法で単純集計を行った。

(1) 被調査者による地域環境についての評価を集計した結果は表1の通りである。

(2) 被調査者の属性を集計した結果は表2の通りである。

3-3 「ポイ捨て」行為によるゴミ問題が個人に与える影響について

「ポイ捨て」行為によるゴミ問題が生活に与える最も重要な影響についての意見は、キーワードに基づいて次のように分類することが出来た(表3を参照)。

表1 被調査者による地域環境についての評価

	良い	やや良い	どっちも言えない	やや悪い	悪い
地域環境総合評価	2 (2.5)	19 (23.8)	43 (53.7)	12 (15.0)	4 (5.0)
衛生状況	1 (1.3)	3 (3.7)	35 (43.8)	26 (32.5)	15 (18.7)
買い物の便	10 (12.5)	24 (30.0)	38 (47.5)	8 (10.0)	0 (0.0)
交通の便	8 (10.0)	29 (36.3)	37 (46.2)	5 (6.2)	1 (1.3)
教育条件	1 (1)	19 (24)	45 (56)	11 (14)	4 (5)
娯楽条件	2 (2.5)	10 (12.5)	43 (53.7)	21 (26.3)	4 (5.0)
医療条件	5 (6.3)	16 (20.0)	43 (53.7)	15 (18.8)	1 (1.3)
自然景観	1 (1.3)	5 (6.3)	30 (37.5)	28 (35.0)	16 (20.0)
近隣関係	25 (31.3)	19 (23.8)	30 (37.5)	3 (3.7)	3 (3.7)
治安状況	12 (15.0)	17 (21.3)	44 (55.0)	7 (8.7)	0 (0.0)

表2 被調査者の属性

		回答数 80人	構成比 100%
性別	男	50	70
	女	24	30
年齢	20-29	7	8.8
	30-39	22	27.5
	40-49	26	32.5
	50-59	16	20
	60以上	9	11.2
家族構成	1人	4	5
	2人	12	15
	3人	33	41.3
	4人以上	31	38.7
学歴	小学校	5	6.3
	中学校 高校	40	50
	専門学校 短大	22	27.5
	大学以上	13	16.2
就職状況	就職	67	83.8
	無職	13	16.2
原居住地	市内その他	58	72.5
	郊外県 郷 鎮	15	18.7
	他の省 市	7	8.8
居住年数	1年未満	4	5
	3年未満	21	26.3
	5年		
	10年以上(転居地が出来た時から)	55	68.7

表3 「ポイ捨て」行為によるゴミ問題の個人への影響

		キーワード
A 身近な生活への影響	a 健康や衛生的面の影響	健康、衛生、臭い、悪臭
	b 生活の不便	OOできない、邪魔
B 地域レベルの影響	c 都市景観や団地イメージへの影響	景観、イメージ、恥ずかしい
	d 近隣関係や地域コミュニティへの影響	近隣関係、信頼感、コミュニティ
C 複合的影響(AとBの組み合わせ)		健康、景観、子供の教育、都市イメージ
D その他		
影響なし		特になし、ない、思いつかない

3-3のまとめ

① ポイ捨てによるゴミ問題の影響について、住民らの多くは自らの経験から、「ポイ捨て」行為によるゴミ問題が存在し、深刻であることを認識している。

② 質問に対して「特になし」あるいは「思いつかない」と答えた被調査者もいる。

3-4 ポイ捨て行為によるゴミ問題の解決について

被調査者が挙げた問題解決の方策や手段を実施する主体(誰が努力するか)により分類(カテゴリー化)する作業を行った(表4)。

表4 「ポイ捨て」行為によるゴミ問題の解決について

	キーワード
A 政府あるいは管理会社に期待する	市政、管理会社、衛生管理部門 法律、ゴミ回収システム、 環境教育、公共意識
B 個人の行動改善に期待する	環境意識、公共意識、個人行動
C 市政 管理会社と個人が共に努力することに期待する	市政、管理会社、個人、協力、 法律、回収システム、環境教育
D 解決できない	できない、難しい
E 分からない	分からない、ノーコメント

3-4のまとめ

① 政府の行為として法律整備、政策改善が最も重視されている。

② 身近な環境問題(「ポイ捨て」行為によるゴミ問題)を解決する意識(保護意識)が多様である。

3-5 マクロな環境問題の解決について

マクロな環境問題の解決について、有効な解決手段を基準としてカテゴリー化を行った結果は表5の通りである。

表5 マクロな環境問題の解決について

	キーワード
A 政策 法律の改善	政策、法律、環境教育、環境監督システム、 環境保護システム、技術発展、資金導入
B 国民の努力	一人一人の努力、国民全員の努力
C 政府と民間の協力	政府と民間の協力
D 技術発展及び資金導入	技術、資金、経済、発展
E 無意見 無関心	分からない、考えたことがない
F その他	

3-5のまとめ

- ①マクロな環境問題の解決について、被調査者らの政府への強い依存性が見られた
- ②環境問題の解決には技術の発展及び資金の重要性も強調された。
- ③環境保護に対する積極的な態度と消極的な態度の両方が存在することから、住民らの環境保護意識は多様であり、また定式化されていないことが考えられる。

3-6 個人別の環境意識

「ポイ捨て」のゴミ問題の個人生活への影響(問題意識)、その問題発生の責任者(原因意識)、その問題の解決に必要なこと(保護意識)という三つの側面から整理し、住民のもつ典型的環境意識タイプがいくつか見いだされた。

- (1) 個人被害経験があるという問題意識を持つ。問題の原因は市政あるいは管理会社にあり、ポイ捨てのゴミ問題の解決には政府あるいは管理会社に期待する。
- (2) 個人被害経験があるという問題意識を持つ。個人行動が問題の原因であるが、問題の解決には政府あるいは管理会社に期待する。
- (3) 個人被害経験はないが、問題の存在を認め、原因意識と保護意識がある。
- (4) 問題意識がない。原因意識と保護意識もない。

4 考察

4-1 住民の環境意識構造

- (1) 問題意識について、全体的に住民は環境問題意識を持っている。しかし、経験から生み出される問題意識に対する態度は消極的である一方、身近な環境問題への認識が強いとも言える。
- (2) 問題の原因について、非個人的要素(法律、政策、都市インフラ)の問題が自分自身の行動よりもっと問題に影響するという意識が一番典型的な考え方である。これは住民の原因意識の主体性が欠如していることを示している。
- (3) 保護意識について、個人が主体的な環境保護の行動を取るという傾向が見られなかった。また、ミクロなポイ捨てのゴミ問題より、マクロな環境問題についての政府への期待がもっと強いのである。つまり、住民らの持つ保護意識にも主体性が欠如している。

被害経験からの問題意識、主体性欠如の原因意識と保護意識は、住民らの環境意識の構造的特徴である。

このような環境意識の共通点は個人便益を重視する意識すなわち強い利己意識の存在である。

4-2 社会変革と住民らの利己的環境意識の形成原因

- (1) 過去に制限された個人利益が社会改革により尊重されたようになり、利己意識が一気に高まってきたと考えられる。
- (2) 現段階で、政府主導の社会体制が転換しつつあるが、過去の影響で、住民らの自ら行動を起こす意識がまた出来ていなかった。

4-3 利己的環境意識とポイ捨て行為

広瀬(1995)³は「環境問題は環境保全という公益と個人の便益享受という私益が対立する社会的ジレンマの構造を持っている」と主張する。社会的ジレンマとは、一人一人の個人が自分の私益を優先する行動を取った結果、環境汚染のように全体にとっての公益が損なわれてしまうパラドキシカルな事態をさしている。これは身近なゴミ問題もマクロの環境問題も同じであろう。個人の持つ環境意識と消費行動が必ずしも一致するとは限らないが、個人の利己的な環境意識が強ければ、個人便益を追求するために公益を注意しない傾向が強くなり、環境配慮行動をとらなくなる。「ポイ捨て」行為は、共有地の環境保全より個人の利便性を重視する選択である。「ポイ捨て」現象が多発し、ゴミ問題になるのは、個人便益を追求した結果であろう。

むすび

中国において、日常生活と密接な環境問題がこれから深刻化していくことは間違いない。社会変革により政府の影が薄くなっていくため、地域住民やコミュニティが環境問題を自立して解決することがますます重要になってくる。これに伴って、住民の共的意識のあり方自体が見直しを迫られるのである。市民らの環境意識をどう変えて、そして市民を環境保護事業の中にどう参与させるか今後の重要な課題の一つであろう。

¹ここでいうゴミ問題とは「ポイ捨て」現象が住宅地内に多発し、住民らの生活に影響を与えている状態を指す。

²李志東 『中国の環境保護システム』 東洋経済新報社 1999年

³広瀬幸雄 『環境と消費の社会心理学—公益と私益のジレンマ—』 名古屋大学出版会 1995年